

# 返信

浜 葉子

終点に着いても降りようとしないうあなたがいた。訝かる視線にも気付かない様子。ガラんとした車両に取り残されていることがわかつているのか。電車は下り電車に変わって、たちまち乗客で座席は埋まり、あなたを乗せたまま横浜駅を出発した。心の深いところと向き合っているのか、それとも放心しているだけなのか、その姿からは曖昧だった。いくつかの駅を通過すると大儀そうに立ち上がり、その駅に着くと家路に急ぐ乗客に押し出されるようにしてあなたは降りた。そして目的地があつて歩いているのかはつきりしない足取りで駅から離れていった。坂道に差し掛かると立ち止まり、深いため息を夕暮れの道に落とし、ゆっくり上りはじめた。そして街灯に照らされる白さが威圧的に立ちはだかる家の前で立ち止まった。入れない！ 入りたくない！ ためらいと緊張で心は固まり、その身を動けなくした。明りが漏れる二階の部屋をしばらく見つめ、次の瞬間意を決したようにあなたは門の中へ消えた。

このあなたとは私のこと。ある時はどうしても門の中に入れず駅に引き返しホテルに泊まったことも一度や二度ではなかった。度々利用したホテルは山下公園近くの小さなホテル。毎回当日を予約する手ぶらの客に、ホテルスタッフの目にはどう映っていただろう。成人した息子と娘はすでに家を出ていた。私は六十歳に差し掛かり、別の人生があるのではと考えはするものの、家を出ることに逡巡する日々を送っていた。子供たちに心の内を告げると、「自分のことだけを考えて」と申し合わせたような返事がふたりから届いた。冒頭の文章は、この頃の私を語ったものである。

そんな時たまたま書店で目にした言葉が全身にずしりと下りてきた。そして浅はかだった娘時代を悔恨させた。その言葉とは  
「一寸先は闇でもあるが、同時に光でもある。闇に放りこまれるか、光を浴びるかは、当人の意思次第だ。人生を他者に委ねるといふ他力的な生き方のなかで光を得ることは絶対がない」

ある書籍の帯に書かれていた作家の言葉である。我が人生をなぞったかのような言葉の通り、自分の人生を親に委ねた結果、光を得ることはなかった。だから、三十四年の結婚生活を終わらせたいと懊悩していた。

そんな私にも、光が差し込むチャンスがまったくなかったわけではない。夫になった人と見合いする前、人生でたった一度の恋愛をした。両親は縁談に耳を貸さず、彼の話をす

る私を疎ましく思ったに違いない。年上の男から騙されているとも思ったのだろう。ある日、職場の昼休みに姉が突然やって来た。

職場は西新宿のオフィス街にあった。ビルに囲まれた空間は当時としてはまだ珍しいカフェテラスだった。そこはビルで働く者の憩いの場で、昼の時間帯は賑わっていた。その象は遊び人風。私も彼に会った当初は風貌から誤解したのだから姉にはキザな男に映ったのだろう。母に伝えた報告は悪しき内容だった。遅い帰宅になり彼がはじめて家まで送ってくれた晩、母は応接間に通してくれたものの素っ気ない挨拶で、父に至っては顔も出してはくれなかった。この先私の両親では見込みがないと悟ったのだろう。海外転勤を控えていた彼は「グッドラック」この言葉を残し、単身で赴任先のニューヨークへ立って行った。こうして私の恋愛は家族の陰湿な反対で終わった。そして、予てから両親が望んでいた相手と見合いをし、国家公務員の妻になった。1979年、世の中は第二次オイルショックが起きていた。

見合いするまでもなく、会う前から決まっているも同然の血族結婚だった。見合いの手は母の従姉の孫であり、その上兄の妻の甥でもあるという血が複雑に絡んでいた。見合い当日の晩、仲人である伯父の息子から「保証付き、推薦するよ、いい奴だから」と電話があったのも気持ちを動かされ、それと実家の空気も影響し付き合うことにした。このころ両親は世襲で事業をしていた実家の跡継ぎである長男の縁談も同時に進めていた。寧ろそちらの方がお家の一大事だった。私は実家に居場所がみつけれず、逃避の場所を結婚にみつけようとしていた。だから周囲の勧めに流され、気位の高い母が常々自慢していた身内だったことも作用し、漠とした不安はあったものの人生を親に委ね、他力的な生き方を選んでしまった。

次男だから何処に住もうと勝手、という触れ込みは簡単に破られた。結婚当初から住んだ湘南の敷地には、未亡人の姑が住む家と息子の家族が住む家が隣同士で建っていた。付き合っていた時は長男家族が住んでいたが、次男の結婚が決まると義兄は勤め先に海外転勤を希望し、ロサンゼルスへの赴任を密かに決めていた。後でわかったことだが、姑と兄嫁との確執に悩んでいた義兄は、親ときれいに別れるための仕事を練り上げていたのだ。

共働きの新婚生活が始まると、夫からは「釣った魚に餌はやらぬ」と言われ、姑からは「一家で一番偉いのは、稼いでくる男ですよ」と、二人から引導を渡された。家族の一員になってわかったことは、この親子はモラル・ハラスメントだということ。そんな人々との暮らしは、精神的暴力で心は次第に疲弊し、娘時代にはいくらダイエットを試みても叶えられなかったスリムなスタイルを短時間で実現させた。

元からリユーマチの持病を抱えていた姑は還暦を過ぎると病状は急速に悪化し、車椅子を使うようになった。私は小学生の子育てと介護で多忙になり、いつそのこと同居した方が互いのために良いのではと考え、そのことを姑に伝えたと、思いもよらぬ言葉が返ってきた。

「何を言うの、この家は長男の家ですよ、長男の帰る家がなくなるでしょ」  
人の解釈は必ずしも自分とは同じではない。姑には人情からの発信が通じないことを心に刻んだ。

ロサンゼルスに赴任していた義兄の帰国が決まると、私達夫婦に手紙が届いた。夫は私にその手紙を見せるでもなく、テーブルに置いたまま出勤した。手紙には、「帰国するが母を看るつもりはない。東京のマンションに住む。あなた達も母を看たくなければ、そこを出ればいい」と書いてあった。「戻らないからお願ひする」ではなく、一人では暮らせない母を私達がおいて出るわけがないことをわかっていて、指示するような手紙をよこした。

帰国した長男家族は何食わぬ顔をして盆暮れには泊りがけでご機嫌伺いにやって来た。姑はことのほか喜んだ。ところが、長男家族が帰ると浮かぬ顔で私を呼んだ。次男の嫁に虚勢を張りたくても、痛みを我慢することはできなかつたのだ。兄嫁ならやりそうな事。それはリユーマチの痛み止め薬が入った箱を姑の手が届かない所へ移動しておくことだった。現在リユーマチの治療は進み、進行を止める薬が開発されているが、当時は治療と言っても痛みを抑える程度だった。痛みが激しい日は風が当たっても痛いと訴えていた。姑がまだ元気だった時に兄嫁をいびつたことは想像がつく。しかし兄嫁の情のなさは、姑の上手をいつていた。

家族になった人々からえげつない行為を受けていたが、そんな私を陰から見守っている人がいた。その人は寿司屋の主人だった。姑が注文したにぎりを届けた帰り、裏に住む嫁の私に声を掛けてきた。

「奥さん、注意しなよ。隣の姑さん、他人に何を言うかわかつたもんじゃない」

「えっ、母が何を言ったの？」

「俺は前から知っているよ、奥さんが姑さんに食事を届けていることをね。でも姑さんは嫁が食事を届けてくれないからと言って注文してきたのよ」

「そんなあ、ひどいわ。昼食はリハビリを兼ねて自分で作ると言うから、食材だけ用意することになったのよ」

寿司屋の主人は長い付き合いから、姑の性格を承知の上での忠告だった。「奥さんまだ若いのに大変だなあ」と言って、まだ温もりのある包みを差し出した。それは子供たちが

大好きな厚焼き玉子だった。他人の人情に胸が熱くなった。

姑はリハビリのため入院していた病院で脳梗塞を起こし、意識が戻らぬまま他界した。六十八歳だった。葬儀を執り行った晩、義兄は私に「母の家の鍵を返してください」と言ってきた。この言葉を聞き「なんて品のない発想をする人だろう」心で吐き捨てた。そして、私ってこんな見方しかされてこなかったのかと自分が哀れになった。しかし、これで十五年通った家とも縁が切れる。そう思うとスッキリもした。ところで、夫からは何も言われていない。いくら何でも姑を看取った私に言うことはあるだろう。そう思い

「今まで面倒みてきた私に礼の一言ぐらいあってもいいと思うのだけれど」

すかさず返ってきた言葉に耳を疑った。

「どうして礼など言う必要があるのだ。母をみてくれなんて、言った覚えはない。あなたが勝手にやったことでしょう」

そして、畳みかけるように言葉は続いた。

「あなたはあと十年生きていればいいよ」

まだ四十歳の妻に「あと十年」と寿命に条件をつけるとは。姑を看取った次は子育てが終われば用はないということか。すでに我が人生悲しすぎて馬鹿馬鹿しくなった。

姑亡き後横浜に移り住んだ。私は六十歳を機に、夫が出勤するとキャリアバッグ一つ持って家を出た。半年が経ったころ夫に居場所を伝えると、スマートフォンに「了解」の二文字が送られてきた。それ以来なしのつぶてだった。私からは『離婚届』を送り返信用封筒も同封したが未だ返送されてこない。すでに別居は十年になり私も間もなく七十歳になる。仕事に就いていたがコロナ禍で無職になり、気晴らしするには持て余すほどの時間を悶々と過ごしていた。

そんな折、長い空白を無視するかのようなメールが夫から届いた。それも妻の身を案じているかのように「コロナ大丈夫ですか？」ときた。「今更心配には及びません」とだけ返すと、夫沈黙。翌日になって「気が狂いそうで、一人では保ちそうにありません。以上」とよこした。社会的には国家公務員から企業の顧問に就いた人。あの自尊心はどこへと訊きたい。ただこの短い文面からでも姑息な人格が読み取れる。情けを乞い戻ることを暗に仕向ける得意技である。モラル・ハラスメントの特徴の一つでもある「自己愛者」の身勝手さと、同時に「大人になりきれない人」という人物像もよく現れている。自己愛者は人を愛せないで人生が過ぎて行っても、愛せないことにまったく苦しまない人だ。だからまわりの者は苦しむ。

私と子供は、夫の無視と支配によりコントロールされ、ひたすら服従の暮らしを強いら

## 返 信

れた。そんな家庭環境は結局母と子の仲を紊乱し、ぎくしゃくした母子関係にしてしまった。夫は家族に用がなくなると、こちら自らが出て行かざるを得なくなるような空気を醸し出し、出て行くよう仕向けた。それなのに、自分が後期高齢になり不安を感じるようになったからと言って「戻って来い」と言えるのか。

「戻りません。異論をもつまえに、自分の器に臍をかんでください」

これが、妻からの返信である。